

日本人学習者の会話の停滞について

— 韓国語の会話事例を題材に —

朴 恩 珠

Stagnation of Conversation among Japanese Learners

— Using Korean Conversation Examples —

Eunjoo Park

抄 録

韓国語教育の研究分野では発音教育を中心に、学習者の発音誤用に関する研究が活発に行われている。ところが、学習者の発音誤用がコミュニケーションに影響を及ぼすものなのか、それともあまり関係のないものなのかについて言及したものはなかった。

本稿では、日本人学習者の発音の駆使に焦点を置いてコミュニケーションスキルを考察してみた。まず、会話事例を通して日本人学習者が韓国語で話す時、どのような状況で会話が停滞するのかを分析した。次に、その停滞と学習者の発音の「正・誤」との関りについて考察した。

会話が停滞する要因は、発音誤用と学習者の学習期間に相応する語彙の不足によって心理的に委縮させられることであった。これによって、発音誤用は会話の停滞に大きく関わっていることが明らかになった。

キーワード：発音誤用、会話の停滞、コミュニケーションストラテジー

(2020年9月24日受理)

Abstract

There is active research on pronunciation errors by learners in Korean language education. However, there has been no mention of whether this affects communication or has nothing to do with it.

This paper is on the pronunciation of Japanese learners and considers their communication skills. First, through examples of conversation, an analysis has been made of the situations in which Japanese learners stagnate when speaking in Korean. Next, the paper considered whether such stagnation has anything to do with learners' pronunciation of "correct/errors".

The reason their conversation is stagnant is that pronunciation errors and learners are disconcerted by the lack of vocabulary that was not corresponded during the learning. By means of this, it has become clear that pronunciation errors are significantly related to the

stagnation of conversation.

Keywords: Pronunciation Errors, Stagnation of Conversation, Communication Strategy

(Received September 24, 2020)

1. はじめに

外国語学習者が目標言語で話す時にわずかなミスでつまずき、正確な情報伝達が相手にできずに会話が途切れてしまう場合がある。目標言語における円滑な会話を妨げる要因は、学習者が同じ言語環境におかれているとしても、学習レベルや会話環境によって異なるものと考えられる。

韓国語教育の研究分野では発音教育を中心に、学習者の発音誤用に関する研究が続けられている。発音に関する研究は多数あるが、日本語母語話者の韓国語学習者（以下、日本人学習者とする）を対象にしたものとして次のような研究を取り上げることができる。まず、発音教育に関して、우인혜 (Woo Inhe, 1998) は、日韓の言語比較を通じた発音の教授法を提案し、정명숙·이경희 (Jeong Myengsuk · Lee Gyenghi, 2000) では、日本人学習者の変異音の情報に基づいて発音教育の効果を試み、오아림 (Oh Arim, 2006) は、日本人学習者を対象に韓国語の閉鎖子音の学習に関して言及した。정명숙 (Jeong Myengsuk, 2003) は、日本人と中国人の韓国語の発話に現れるアクセントを比較し、それぞれの学習者に適切な発音教育を提案し、이노우에 (Inoue, 2005) は、日本人学習者を対象に韓国語のアクセントをベースにする発音教育の方法について提案し、하세가와 (Hasegawa, 1997, 2005) は、日本人学習者を対象に韓国語の音調教育の効果を提示した。野間 (2007)、油谷 (2010) では、日本人学習者にとって韓国語の子音の平音、激音、濃音の区別の難しさを例示した。次に、発音誤用については、김수진 외 (Kim Sujin et al., 2002) は、日本人学習者の平音、激音に生じる発音誤用を取り上げた。이수원 (Lee Suwon, 2016)、장선미 (Jang Sunmi, 2015)、정현숙 (Jeong Hyeunsuk, 2013) では終声の発音誤用について日本語と韓国語の発音の相違に焦点を当てて分析した。황연신 (Whang Yeunsin, 2002) は日本語と韓国語の鼻音の発音を音声学的な立場で分析した。

このように韓国語の発音教育をめぐる研究が継続されていることは、韓国語学習者に発音教育が重要であることの表れである。それは目標言語のコミュニケーションに大きく関わるからではないだろうか。これまでのところ、学習者の発音の「正・誤」がコミュニケーションに影響を及ぼすかどうかについては具体的に言及されてこなかった。

本稿では日本人学習者の発音に焦点を置いてコミュニケーション能力を観察する。主に日本人学習者が韓国語で話す時、会話が停滞する要因は何か、それは発音とは関りがあるのか否かについて考察する。その方法として、まず、会話事例を通して日本人学習者が韓国語を用いて話す時、どのような状況で会話の停滞が生じるのかに焦点を置きながら、その時に学習者が用いるコミュニケーションストラテジーについて観察してみる。次に、その会話の停滞は学習者の発音と関りがあるのか否かについて分析する。今回の会話分析で

は学習者の発音の駆使に重点を置くため、文法に関するものは分析範囲に含めないことにする。分析対象は韓国語の学習期間が6か月以上2年未満の日本人学習者(レベル TOPIK3級以下)に限定する。分析資料¹⁾はアイスブレイクで交わされた韓国語の会話事例を用いる。

2. 会話分析

韓国語は日本語と統語的に類似しているため、特に TOPIK3 級以下のレベルにある日本人学習者にとっては、とりかかりやすいといわれている。そのため、初級の日本人学習者が韓国語で話す時に生じる問題は統語的なことより、それ以外のことに起因するものが少ない。日本人学習者の韓国語のコミュニケーションスキルを向上させるためには統語以外の学習領域に目を向けてみる必要がある。

2.1 会話事例

ここでは日本人学習者の会話事例を取り上げて、どのような場面で会話が停滞するのかについて会話のやりとりをたどりながら分析していく。会話事例に現れる発音の間違ひは同じようなところにも生じており、発音誤用とみなされる。会話事例のローマ字表記で網かけになっている箇所は発音誤用を示している。

「会話1」における話し手 [T] は教員、[L1] の学習期間は8カ月である。

「会話1」²⁾

- (1) T: 이 신문 누구 거예요?
i sinmun nugu keoyeyo?
この新聞 だれのですか。
- (2) L1: 그것은… えーと、성, 섬, いや…
geuges-eun… e-to, seong, seom, iya…
それは…えーと、せん、せむ、いや…
- (3) T: 선생님.
seonsengnim.
先生。
- (4) L1: はい。아니, 네, 성 선생님 것입니다.
hai.ani, ne, seongsengnim keosimnida.
はい。いや、はい。せんせいのものです。
- (5) T: 그럼 여기 안경이 몇 개 있어요?
gueleom yeogi angeong-i myetke itseyo?
それではここに眼鏡が何個ありますか。

(6) L1: 네, 안…우む…안…겨니…두… 있어요.
ne, an…um…an…geye-ni…tu… itseoyo.
はい、め…うむ…め…がねが2… あります。

(7) T: 안경이 두 개 있어요.
angyeong-i tu ge itseoyo.
眼鏡が2個 あります。

(8) L1: 아, 네. 안건 두 개.
a, ne. angyen tu ge.
あ、はい。眼鏡2個。

(学習期間8カ月)

「会話1」の発話(2)をみると、学習者は非言語的な談話標識³⁾「えーと」で時間を稼ぎながらも「선생님 seonsengnim (先生)」という発音にはならず、「いや」という日本語を発している。発話(4)では「はい」と日本語から始めている。発話(6)では、「네, 안…우む…안…겨니…두… 있어요. an…um…an…geye-ni…tu… itseoyo.」のように unnecessary element (needless element) を加えて時間を稼いで発話したものの、正しい発音ではなかった。発話(8)では、「안건 angyeon」と発話しているが、正しくは「안경 angyeong (眼鏡)」である。これは発話(7)の直後にかわされたものであるが、発音「o/ng」を「l/n」に間違えている。発話(8)は途中で途切れている。

このように、母語や談話標識を用いる、もしくは会話に unnecessary element が現れることは学習者の切迫した心理的な状況⁴⁾を表している。また発話(8)のように会話が不自然な形で終わることも、そのような学習者の心理的な状況を表すものである。

「会話2」における話し手[T]は教員、[L2a]と[L2b]の学習期間は10カ月である。

「会話2」

(9) T: 이번 겨울방학에 뭐 하실 거예요?
ibeon gyeoulbanghak-e meo hasil keoeoyo?
今度の冬休みに何をする予定ですか。

(10) L2a: 아, 이번 겨울방학…
a, iben gyeoulubaghak…
あ、今度の冬休み…

(11) T: 네, 무슨 계획 있어요?
ne, museun gehyek itseoyo?
はい、何か計画はありますか。

(12) L2a: 아, 무슨 계획쿠… 미우라 씨랑 え, 준국에 가요.
a, museung geyehyeku… miura-ssi-rang e, junkuk-e gayo.

あー、何か計画… 三浦さんと えー、中国に行きます。

(13) T: 미우라 씨도 중국에 가세요? 아 참, 전공이 중국어였죠?

miura ssi-do junguk-e gaseyo? a cham, jeongong-i jungkugeoyeotchyo?

三浦さんも 中国に行くんですか。あ そうか、専攻が中国語だったよね。

(14) L2a: 네. 우리 중국어 공부해요.

ne. uri jungkugeo konbuheyo.

はい。私達 中国語 勉強します。

(15) T: 이번에 중국에는 관광하러 가세요?

ibeon-e jungkuk-eneun kwangwanghareo gaseyo?

今回 中国には 観光のために 行かれるんですか。

(16) L2b: あのー、 관광…아니… 중국어 공부.

ano-, kwanggwa… ani… jungkugeo konbu.

あのー、観光… いいえ… 中国語勉強。

(17) T: 중국어 단기 연수요?

jungkugeo tangi yeonsuyo?

中国語の短期研修ですか。

(18) L2b: あ… そうそう、영수입니다.

a… sousou, yeongsu imnida.

あ…そうそう、研修です。

(19) T: 네, 방학 동안에 연수하러 가는군요. 중국 어디에서요?

ne, banghak tongan-e yeonsuhareo ganeunkunyo. jungkuk eodi-eseoyo?

はい。休みの間 研修しに行くんですね。中国の どこですか。

(20) L2a: 네, 방학에 영수하러 가요.

ne, banghak-e yeongsuhareo gayo.

はい、休みに 研修しに行きます。

(21) T: 중국은 처음이세요? 거기서 해보고 싶은 거 있어요?

jungkuk-eun cheoemiseyo? keogi-seo hebogo sipeun geo itseoyo?

中国は 初めてですか。そこで やってみたい 事 ありますか。

(22) L2b: えーと、 そう. 중국은 처음…처음입니다. えーと…해보고…?

e-to, sou. jungkuk-eun cheoeung…cheoeuniminda. e-to…hebogo…?

えーと、そう。中国は 初め…初めてです。えーと、してみたい…?

(学習期間 10 カ月)

「会話 2」の発話 (10) と (12) では前者の繰り返し⁵⁾になっているものの、発話 (10) では「겨울방학 gyeoulbanghak (冬休み)」の「겨울 gyeoul..」は流音の「ㄷ/ㄴ」が終声だが母音の「u」が添加されて「겨우루 gyeoulu」となっている。発話 (12) では「계획 gehyek (計画)」の終声「k」に母音の「u」が添加されて「계획쿠 geyehyeku」となっ

いる。(15)の応答として(16)をみると、話し手は談話標識を先頭に出しながら「관광 kwangwang (観光)」と言いたいのだが、その発音が正しくできないため、他の単語を用いて話を進めようと努めている。本来の発音ができず、何回かの発音誤用をした話し手は自ら「ㄴ/n」と「ㅇ/ng」を正確に区別して発音することが難しいと感じて、(17)の問いかけに対して(18)では意図的に「중국어 단기 연수 jungkugeo tangiyeonsu (中国語短期研修)」から「중국어 단기 jungkugeo tangi (中国語短期)」を省略して、「연수 yeonsu (研修)」という単語だけを用いて短く応答しようとしているのだが、目標言語の韓国語より先に母語の日本語が発話されることは話し手が緊張していることの表れである。(20)にも話し手の緊張の様子が窺える。(20)の場合、[L2a]は前者[T]の繰り返しをするだけで、「中国のどこ」で研修が行われるかという(19)の問いかけには答えていない。つまり、発話(19)に対して、発話(20)は自然な会話の流れとなっていない。(22)では談話標識と母語の発話が重なってみられる。そしてその内容は発話(21)の繰り返しに等しいものである。発音誤用は発話(10)、(12)、(14)、(16)、(18)、(20)、(22)にみられる。発音誤用は母音添加とパッチム「n」、「m」、「ng」である。

この会話をみると、「[L2a]」「[L2b]」の両学習者は発音が難しい単語に代わる別の単語を用いた言い換えができず、重なる発音誤用によって会話が停滞する場面が増えている。そのため、学習者は相手側に会話の展開を委ねてしまっている。

「会話3」における話し手[T]は教員、[L3a]と[L3b]の学習期間は1年である。

【会話3】

(23) T: 여기 안내도가 있네요. 식당 옆에 있는 건물은 뭐예요?

yeogi annedo-ga itneyo. siktang yeop-e litneun geonmul-eun meoeyo?

ここに案内図がありますね。食堂の隣にある建物は何かですか。

(24) L3a: あのー、으, 응.. 응행입니다.

ano-, eu, eung..eunghengimnida.

あのー、ぎ、ぎん..ぎんこうです。

(25) T: 네, 은행이 있네요. 그럼 우체국 옆에는 뭐가 있어요?

ne, eunheng-i litneyo. geureom ucheguk yeop-eneun meo-ga itseoyo?

はい、銀行がありますね。では、郵便局の隣には何かありますか。

(26) L3a: 아. 우체국 옆에는...

a, ucheguk yep-eneun...

あ、郵便局の隣には...

(27) T: 네, 뭐가 보여요?

ne, meo-ga boyeoyo?

はい、何が見えますか。

(28) L3a: えーと, 버스.. 버스.. 乗り場 있어요.

e-to, beosu.. beosu.. noriba itseoyo.

えーと、バス..バス..乗り場あります。

(29) T: 네, 버스 타는 곳이 있네요. 그럼 우체국 뒤에는 뭐가 있어요, 미호 씨?

ne, beosu taneun got-i itneyo. kuereom ucheguk dyi-eneun meo-ga itseoyo, Miho ssi?

はい、バス乗り場がありますね。では、郵便局の後ろには何がありますか、ミホさん。

(30) L3b: えーと, 우체국 뒤에는..., 우체국...뒤?

e-to, ucheguk dyi-eneun..., ucheguk... dyi?

えーと、郵便局の後ろには...、郵便局...後ろ?

(31) T: 네, 우체국 뒤에는?

ne, ucheguk-dyi-eneun?

はい、郵便局の後ろには?

(32) L3b: ..公園..고..공원.

..kouen..ko..kongwong.

..公園..こ..こうえん。

(33) T: 공원.

kongwon.

公園。

(34) L3b: 아-, 네.

a-, ne.

あー、はい。

(35) T: 그럼 지하철 역은 어디에 있어요?

kuereom chihachyeol yeok-eun eodi-e itseoyo?

では、地下鉄の駅はどこにありますか。

(36) L3b: 지하철 역은 어디..., 데파트하고 벼..병원 사이에 있어요.

chihachyeol yeok-eun eodi..., depa-to-hago byeo..byeongwong sai-e itseoyo.

地下鉄の駅はどこ..., デパートとびょう..びょういんの間にあります。

(学習期間1年)

「会話3」の発話(24)では、「은행 eungheng」と発話しているが、正しくは「은행 eunheng (銀行)」である。話し手は談話標識「あー」で時間を稼いで記憶をたどったものの、本来の発音を思い出せていない。発話(26)は前者の発話を繰り返すだけで、返答に至らず、発話(28)では談話標識「えーと」で時間を稼いでみたが、結局は日本語で「乗り場」と答えている。本来は「타는 곳 taneun got (乗り場)」である。発話(30)では、談話標識の「えーと」が再び現れ、その次に前者の発話の繰り返しがみられる。発話(32)では、先に「公園」と日本語で発話し、続いて「고..공원 ko..kongwong」と言っているが、正しくは「공원 kongwaon (公園)」である。発話(34)の「아-, 네. a-, ne.」は会話の流れが不自然に感じ

させられるが、それは話し手が意図的に単語「공원 kongwaon (公園)」を言わずに回避⁶⁾しているためであると思われる。発話(36)では、再び前者の発話の繰り返しと日本語の発話がみられる。

このように会話に必要な談話標識や感嘆詞、繰り返しなどが度々出現するが、それは話し手が発話に自信がないことを示唆している。会話のやりとりを一瞥すると、会話者の発話順番(turn)が転移しており、会話が進展しているようだが、中身のあるコミュニケーションになっているわけではない。

「会話4」における話し手[T]は教員、[L4]の学習期間は1年3カ月である。

「会話4」

(37) T: 점심 식사 하셨어요?

jeomsim siksa hasetseoyo?

昼 食事 しましたか。

(38) L4: 아, 네. 정, 전싱...

a, ne. jeong, jeonsing...

あ、はい。ひ、ひる...

(39) T: 점심.

jeomsim.

昼。

(40) L4: 아, 네. 전싱 먹었어요. 선생님은요?

a, ne. jeonsing meogeotseoyo. seonsennimeunyo?

あ、はい。ひる 食べました。先生は？

(41) T: 네, 전 생선구이를 먹었는데, 뭘 드셨어요?

ne, jeon sengseongui-leul meogeotnunde, meol deusyetseoyo?

はい、私は焼き魚を食べましたが、何を食べましたか。

(42) L4: 네, 저도 생선...구이를 먹었는데...

ne, jeo-do seonseon... gui-leul meogeotneunde...

はい、私も やき...ざかなを食べたんですが...

(43) T: 아, 그래요? 생선구이 좋아하세요?

a, geureyo? seongseongui joahaseoyo?

あ、そうですか。焼き魚 好きですか。

(44) L4: 네, 그래요.

ne, geureyo.

はい、そうですね。

(45) T: 생선구이를 자주 드세요?

sengseongui-leul jaju teuseyo?

焼き魚をよく食べますか。

(46) L4: 아, 자주.

a, jaju.

あ、よく。

(学習期間 1年3カ月)

「会話4」の発話(38)は、発話(37)の適切な応答とはいえない上に、「점심 jeomsim (昼)」の発音が上手くできず会話が停滞している。むしろ発話(37)の応答としては、発話(40)がふさわしいものと思われるが、発話(40)までの会話の流れをみると、発話順番(turn)の転移が自然な形で運ばれたわけではない。また発話(44)の「네, 그래요. ne, geureyo.」は、(43)の応答として不自然であり、「네, 생선구이를 좋아해요 ne, seongseongui-leul joaheyo (はい、焼き魚が好きです。)」もしくは「네, 좋아해요 ne, joaheyo (はい、好きです。)」の方が自然である。発話(44)と(46)は不自然な形になっているが、それは話し手が「생선구이 seongseongui (焼き魚)」という単語を回避しているためであると思われる。

「会話5」における話し手 [T] は教員、[L5] の学習期間は1年6カ月である。

「会話5」

(47) T: 취미가 뭐예요?

chymi-ga meoeyo?

趣味は何ですか。

(48) L5: 제 취미는...

je chymi-neun...

私の趣味は...

(49) T: 네, 취미는?

ne, chymi-neun?

はい、趣味は？

(50) L5: ...えーと、音楽... 들어요.

... e-to, ongaku... deuleoyo.

...えーと、音楽... 聴きます。

(51) T: 아, 음악감상이군요. 어떤 음악을 좋아하세요?

a, eumakgamsangigunyo. eoddeon eumak-eul joahaseyo?

あ、音楽鑑賞ですね。どんな音楽が好きですか。

(52) L5: 어떤...?

eoddeon...?

どんな...?

- (53) T: 예를 들어, 클래식, K-pop…
yeleul deuleo, kellesik, k-pap…
例えば、クラシック、K-pop…
- (54) L5: 아, K-pop을 좋아해요. 그리고 買い物, 아, 아니, 쇼핑구, 도쿠서, 오리.
a, k-pap-eul joahaeyo. geuligo kaimono, a, ani, syopingu, dokuseo, yori.
あ、K-popが好きです。そして買い物、あ、いや、ショッピング、読書、料理。
- (55) T: 취미가 다양하네요. 쇼핑은 얼마랑 해요?
chymi-ga dayanganheyo. syoping-eun eomma-lang heyo?
趣味が多様ですね。ショッピングはお母さんとしますか。
- (56) L5: 아뇨, …えーと、낭돈센?
anyo, …e-to, nangdonsen?
いいえ、…えーと、おとうと？

(学習期間1年6カ月)

「会話5」の発話(50)では、「…えーと、音楽… 들어요.」となり、日本語と韓国語の混在がみられる。この発話で話し手は「음악감상 eumakgamsang (音楽鑑賞)」という単語を用いることができなかったことが分かる。そのため、発話(48)で話し手は「제 취미는…je chymi-neun… (私の趣味は…)」と戸惑いを見せていたように思われる。発話(52)では速い反応はできなかったが、発話(54)では速く展開に臨んだものの、日本語で「買い物」と発している。それを慌てて「쇼핑syoping」に訂正しているが、本来の発音にはない余分な母音が添加されている。発話(54)は文というより、単語を並べているだけで発話が終わってしまっている。発話(56)では「아뇨, …えーと、낭돈센? anyo, …e-to, nangdonsen?」と発話しているが、「남동생 namdongseong (弟)」の発音が正確にできないため、談話標識の「えーと」を用いながら、相手に単語もしくは発音を確認しているかのように質問の形で不自然に発話が終わっている。

「会話6」における話し手[T]は教員、[L6a]と[L6b]の学習期間は1年10カ月である。

【会話6】

- (57) T: 방학 때 한국 가서 관광은 많이 했어요?
banghak dde hanguk gaseo kwangwang-eun mani hetseoyo?
休みの時、韓国に行って観光はたくさんしましたか。
- (58) L6a: 네, 아사히 씨랑 같이 돈대문 시장…시장…?
ne, asahi ssi-rang gachi tondemun sijan… sijing…?
はい、アサヒさんと一緒にトンデムン いちば…市場…?
- (59) L6b: 동대문 시장하고 난산 타워에 갔어요.

tondemung sijang-hago nansan tawo-e gatseoyo.

トндеムン市場とナンサントワーに行きました。

(60) T: 동대문 시장하고 남산 타워에 갔었어요? 그리고요?

tondemun sijang-hago namsan tawo-e gatsetseoyo? geurigoyo?

東大門市場と南山タワーに行きましたか。それから?

(61) L6a: 임, 잉 ..., えーと, 인사돈에서 차도 마셨어요.

im, ing...e-to, insadon-ese cha-do masyeotseoyo.

いむ、いん、えーと、インサトンでお茶も飲みました。

(62) L6b: 거기서 가족 선물루 이거저거 샀어요.

keogiseo gajok seonmulu igeojeogeo satseoyo.

そこで家族プレゼントいろいろ買いました。

(63) T: 인사동에도 갔었군요. 선물은 뭘 샀어요?

insadong-edo gatseotkuny. seonmul-eun moel satsoeyo?

仁寺洞にも行ったんですね。プレゼントは何を買いましたか。

(64) L6b: 선물루? 제 거는 코스메, 아니...화장...?

seonmulu? je keo-neun kosume, ani...hwajang...?

プレゼント? 私のものはコスメ、いや...化粧...?

(65) L6a: そうそう, 한국 화장품 진짜 좋아요.

sousou, hanguk hwajanpun jinccha joayo.

そうそう、韓国けしょうひん本当 いいです。

(66) T: 한국 화장품이 뭐가 그렇게 좋아요?

hanguk hwajanpum-i meo-ga guereotke joayo?

韓国化粧品は何がそんなにいいですか。

(67) L6a: えーと, 향...何っていう...それ, 아, 향기?

e-to, hyan...nantteiu...sore, a, hyangi?

えーと、かお...なんていう...それあ、かおり?

(68) T: 아, 향기가 좋아요?

a, hyanggi-ga joayo?

あ、香りがいいんですね。

(69) L6b: えーと, 가족 거는 인, 임, 인삼차하고 생강? 차를 샀어요.

e-to, kajoku keo-neun in, im, insamcha-hago sengan? cha-leul satseoyo.

えーと、家族のものはいん、いむ、いんさんちゃとしょうが? ちゃを買いました。

(70) T: 인삼차하고 생강차도 샀군요.

insamcha-hago senggangcha-do satkuny.

人參茶と生姜茶も買ったんですね。

(学習期間 1 年 10 カ月)

「会話6」の発話(61)の「임, 잉..., えーと, 인사돈에서 차도 마셨어요. im, ing...e-to, insadon-ese cha-do masyeotseoyo.」、発話(67)の「えーと, 한…何っていう…それ, 아, 한기? e-to, hyan…nantteiu…sore, a, hyangi?」、発話(69)「えーと, 가조쿠 거는 인, 임, 인산차하고 샌간? 차를 샀어요. e-to, kajoku keo-neun in, im, insancha-hago sengan? cha-leul satseoyo.」をみると談話標識がよく出現するところには共通点がみられ、話し手は「一時停止 (pause)」の状態から抜け出すため、単語の初音節をまず発しながら発音を確認しようと試みている。それは会話を継続しようとする意志表現でもあり、その間、会話が完全に途切れることを防ぐために談話標識を用いているのである。会話に適切な単語が話し手の頭に浮かんでいないとしても、話し手は正確に発音ができるのかについて自信がないので、躊躇っているものとみられる。つまり、正しい発話に修正するための時間を稼ごうとして談話標識の「えーと」を挿入し、文を成す要素と要素の間の不自然な空白を埋めて間をもたせようとしている。発話(65)の「そうそう, 한국 화장품 진짜 좋아요. sousou, hanguk hwajanpun jinccha joayo.」や発話(67)の「えーと, 한…何っていう…それ, 아, 한기? e-to, hyan…nantteiu…sore, a, hyangi?」では会話を続けることに気を取られるあまり、日本語を用いて会話をつないでいる。発話(64)の「선무루? 제 거는 코스메, 아니…화장…? seonmulu? je keo-neun kosume, ani…hwajang…?」は韓国語の単語を知らなかったために会話が途切れた場合で、発話(69)の「えーと, 가조쿠 거는 인, 임, 인산차하고 샌간? 차를 샀어요. e-to, kajoku keo-neun in, im, insancha-hago sengan? cha-leul satseoyo.」は正確な発音ができなため、ただどしくつないでいる。発話(62)と(64)の「선무루 seonmulu (プレゼント)」、(69)の「가조쿠 kajoku (家族)」は母音添加の発音誤用である。

2.2 会話分析の結果

日本人学習者の韓国語の会話事例の観察を通して、どのような状況で会話が停滞するのかを分析してみた。学習者は相手の発話が理解できる場合においても反応が早くできず、会話のリズムが乱れて「一時停止 (pause)」の状態になる場面が多くみられた。そのように会話を停滞させる要因は、学習者の学習期間に相応する語彙の不足、及び発音誤用によるものと考えられる。まず、学習者の語彙の不足は次のようなことから推測できる。例えば、会話のやりとりの際、学習者にとって該当する単語が発音し難いものであれば、その類似語の中から発音しやすい単語を選ぶか、もしくは別の表現で会話を続けることができる。しかし、会話事例にはそのような試みがあまりみられず、むしろ学習者は適切な言葉が見つからない場合には、前者の発話を繰り返しながら発話順番の転移を試みている。次に、発音誤用については主に2つに分けられる。ひとつめは余分な母音添加で、もうひとつは「ㄹ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」の間違いであった。学習者が発話する時に発音誤用が生じると会話の展開がスムーズにならない場面が多くみられた。

上記のようなことが会話で生じると学習者は過度に単語や発音に気を取られるため、発話に集中できなくなり、順調な会話のやりとりが妨げられる。そのようなことが重なると、学習者は苦手な言葉を意図的に回避しようとする。または発話時に何度も繰り返して正確

な発音を試すことになるので、会話は停滞することになる。学習者が会話中に自分の苦手なところを意識すればするほど、慌てて不必要な発話や仕草を付け加えてしまい、その結果、会話の展開が思わしくないものとなっていくのである。会話の時間は延びてはいくものの、学習者が意図していたような自然な会話のやりとりにはならず、会話の内容は「一時停止 (pause)」に等しい状態に陥ってしまう。このように会話が上手く展開できないと、学習者は自分が原因で会話が停滞すると思い、心理的に委縮させられることになる。学習者にとって気楽に会話できる環境だったとしても学習者の苦手意識や失敗の経験によって不安が生じると、大半の学習者は会話以外のことに意識が向いて、会話の展開について消極的になることが多い。このような学習者の心理的な委縮は順調な会話の展開を妨げることとなる。つまり、学習者が心理的に委縮すると発話に対して過度な緊張が生じ、普段は簡単に話せることでさえも発話に詰まり、さらにその訥音のような状態を恥ずかしいと思ひ、悪循環に陥ってしまう。そのようなことを繰り返すと会話の状況に悪影響を及ぼし、簡単な単語さえも思い出せなくなり、会話は中断されてしまうのである。

3. 考察

3.1 会話の停滞について

会話を分析してみると、会話が停滞する時には発音誤用がみられた。今回の会話事例でみられた発音誤用は学習者の母語である日本語の影響によるものと推測される。

まず、母音添加の発音誤用については次のようなことが考えられる。日本語の平仮名と片仮名は音節文字なので、単語が母音で終わる傾向が強い。つまり、母音を伴わない分離された子音字として用いられるのは「ん」だけなので、終声が「ん」の単語は終声が母音の単語に比べると数は少ない。つまり、「ん」で終わる単語を除いては母音終声なので、日本語は母音終声の単語が大半を占める⁷⁾。そのような母語の言語慣習から日本人学習者は単語が母音で終わる形を自然に感じるか、もしくはその方が発音しやすいものと考えられる。そのため、日本人学習者が韓国語で話すとき、意図的ではないが終声に母音をつけてしまう傾向にある。

次に、パッチム「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」の発音誤用については日本語の「ん」の影響が考えられる。表1は「ん」の発音が直後の音によって変化することを示したものである。

表1 「ん」の発音

①[t, d, n, r]音が後ろにくる場合：[n]	②[p, b, m]音が後ろにくる場合：[m]	③[k, g]音が後ろにくる場合：[ŋ]	④[ni]音が後ろにくる場合：[ɲ] ⁸⁾
本当 ほんとう [hontou]	乾杯 かんぱい [kampai]	満開 まんかい [maŋkai]	こんにやく [koɲn (i) yaku]
信頼 しんらい [shinrai]	昆布 こんぶ [kombu]	進学 しんがく [shiŋgaku]	カンニング [kaɲningu]
3年 さんねん [sannen]	群馬 ぐんま [gumma]	半額 はんがく [haŋgaku]	筋肉 きんにく [kiɲniku]

(川上 1977 : 81-85 を参考に作成)

表1を見ると分かるように「ん」は単語によって発音が変わるが、パッチム「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」には、それぞれの発音があるので、変化することはない。具体的にいうと、音節ごとに鼻音終声を伴う「선생님seonsengnim (先生)」、「점심jeomsim (昼)」、「방문bangmun (訪問)」、「관광kwangwang (観光)」などの単語では、学習者の鼻音の間違いがよくみられる。これは日本人学習者にとって発音の区別が難しいものであり、「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」をどちらともいえないような曖昧な発音 (ambiguous pronunciation) で通そうとすることは日本人学習者の発音誤用の類似点でもある。そのため、「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」がパッチムになる場合、日本人学習者は「ㄴ/n」を「ㄹ/m」と、「ㅇ/ng」を「ㄴ/n」というように取り違えて発音することがよくある。

次の表2を見よう。

表2 日本人学習者の書き取りテストでよくみられる終声「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」の誤用パターン

単語	誤用事例
① 선/생/님 [seon/seng/nim] (先生)	성선님 [seong/sen/ning] 섬생님 [seom/seng/nin] 성샘님 [seong/sem/nim]
② 방/문 [bang/mun] (訪問)	밤문 [bam/mun] 밤몽 [bam/mung] 반문 [ban/mun]
③ 관/광 [kwan/gwang] (観光)	광광 [kwang/gwang] 관광 [kwam/gwang] 관관 [kwan/gwan]

表2は日本人学習者の書き取り (dictation) テストでよくみられるパッチム「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」の誤用パターンである。この誤用パターンは学習者が話すときにも書くときにも同様に現れる。表2のような鼻音の誤用は、学習期間に関わらずよくみられるケースであり、日本人学習者はパッチム「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」について曖昧な発音をする、もしくはそれらの違いを意識して発音していないという指摘が韓国語の教育現場でなされてきた。このように「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」の発音に混同が生じるということは、学習者がそれぞれの発音ができないというより、日本語「ん」の影響によって「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」の発音について正確に区別しにくいからであると思われる。そのため、学習者はパッチム「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」を「ん」の発音に無意識に当てはめることがある。例えば、表1の③の影響とみられる発音誤用は、「会話2」の発話(12)では「무슨 계획쿠 museung geyehyeku」と発しているが、正しくは「무슨 계획 museun geyehyek」である。また発話(16)でも「관광 kwanggwa」と発しているが、正しくは「관광 kwangwang」である。表1の①の影響とみられる発音誤用は、「会話6」の発話(58)にある「돈대문 tondemun」は正しくは「동대문 tongdemun」である。つまり、日本人学習者はパッチム「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」を発音する際、無意識に日本語の「ん」の発音に対応している可能性がある。そのため、発音に混乱が生じて素早く反応できないものと考えられる。そのようなことは話すときにネガティブに作用するので、学習者は「ㄴ/n」、「ㄹ/m」、「ㅇ/ng」

と「ん」の相違を明確に認識して、言葉を覚える必要がある。学習者が正しい発音ができないということは正確に表現できる言葉が少ないということであり、それは学習者の表現力や語彙力の向上にもネガティブな影響を与える。

3. 2 コミュニケーションストラテジー

会話事例を通して会話の停滞場面に注目してみたところ、会話が停滞する場面では、学習者は会話を続けるために様々な工夫をしていることが分かった。今回取り上げた会話事例では、学習者はいくつかのコミュニケーションストラテジー (communication strategy) を用いていた。ここでいうコミュニケーションストラテジーとは学習者が目標言語の知識や表現能力を十分に習得していないため、コミュニケーションが上手くできないときに用いる言語行動や態度のことである。

今回の会話事例では学習者が何らかの理由で会話が詰まったときに用いたコミュニケーションストラテジーは次の4つであった。

1. 不必要な要素 (needless element) 添加
2. 談話標識の使用
3. 前者の繰り返し
4. 発話の回避 (utterance avoidance)

例えば、不必要な要素 (needless element) 添加や談話標識の使用は、話し手が何らかの理由で発話に詰まり、次の発話のために時間を稼ごうとするときに用いられる。また前者の繰り返しは、会話において自己主張や返答への反応ではあるが、同意や肯定を表明しているとは限らない。それは幼児のオウム返しのように相手に依存していると解釈される。学習者は会話の主導権を相手に譲ることで、会話の展開を相手に一任し、その誘導に従うことになる。発話の回避 (utterance avoidance) も、特定の発音や単語を回避しながらその解釈を相手に委ねることになるので、その狙いは繰り返しと似ている。このように、会話の展開を相手に依存してしまうのでは能動的なストラテジーとはいえない。学習者が自分のポジションを維持しながら会話を展開するためには、より能動的かつ積極的なコミュニケーションストラテジーの工夫が必要である。

次の表3は「会話1」から「会話6」までの会話分析を示したものである。

表3のコミュニケーションストラテジーにみられる談話標識はすべて日本語で発話されたもので、その他にも語彙の不足のために日本語で発話する場面がみられた。このように母語を用いて発話するというはその場面にふさわしい目標言語の単語が分からなかったからであると思われる⁹⁾。

表3 会話の停滞の要因とコミュニケーションストラテジー

会話	停滞の要因	コミュニケーション ストラテジー	狙い
事例 1	発音誤用：「ㄴ/ㅇ」	不必要な要素の添加 談話標識の使用	時間稼ぎ
事例 2	発音誤用：「ㄴ/ㅇ」 語彙の不足	前者の繰り返し 談話標識の使用	時間稼ぎ 発話順番の転移
事例 3	発音誤用：「ㄴ」 語彙の不足	前者の繰り返し・発話の 回避・談話標識の使用	時間稼ぎ 発話順番の転移
事例 4	発音誤用：「ㅇ」 語彙の不足	発話の回避	発話順番の転移
事例 5	発音誤用：「ㅇ」 語彙の不足	談話標識の使用	時間稼ぎ
事例 6	発音誤用：「ㄴ/ㅇ」 語彙の不足	談話標識の使用	時間稼ぎ 発話順番の転移

4. おわりに

目標言語の学習が進むにつれて必然的に会話の場面は多様になってくる。外国語学習者が試行錯誤をしながらも様々な方法を用いて目標言語の学習を続けるのは、目標言語で上手にコミュニケーションしたいという目的があるからである。コミュニケーションは「会話をはじめること、会話を続けること、会話を終わらせること（堀口1997:2）」という一連のやりとりで成立している。これら3つのやりとりは簡単そうに思われがちだが、実際の会話場面ではいつも満足ができるコミュニケーションとなるわけではない。しかも目標言語を用いるコミュニケーションの場合には会話を始め、会話を続け、会話を終わらせるということに加えて、目標言語の語彙や表現、文法、さらに流行語や新造語などの幅広い知識から、それぞれの場面に合わせた適切な選択をしながら継続的に文を作らなければならない。いつもそのようなスキルが同時に求められることを知っていながらも、ほとんどの学習者は目標言語で円滑なコミュニケーションができることを目指している。それは学習者の目標言語の運用能力を示すことにもなるので、学習者にとってコミュニケーションスキルは重要である。

本研究では会話事例を通して会話を停滞させる要因について考察した。会話の停滞は学習者が目標言語の会話に慣れていないことで的確に反応できないこともあるが、今回取り上げた事例では、会話が停滞する要因は主に学習者の発音誤用によるものであった。また会話で、学習者が母語を発して会話が途切れる場面もみられたが、それは学習者の語彙の不足によるものと思われる。そのようなことによって心理的に委縮させられると、学習者は会話の主導権を取ることができず、他者に依存して発話する場面が多くみられた。言い替えると、ささいなつまづきであっても、それは学習者の心理的な情緒にまで影響を及ぼし、自然な会話の展開を妨げることになる。そのような事態を減らすには学習期間に相応する語彙力と正確な発音の習得が前提となる。特に、韓国語では発音誤用は会話に限らず、表2が示すように「書くこと」にも影響するので、正しい目標言語の習得のために発音学

習は重要な学習領域といえる。

大半の教育現場では発音学習において、シャドーイング学習をしながら韓国語と日本語の発音の相違点を区別するように取り組んでいる。理想的には発音したことを学習者が即座に文字で確認できる学習環境を作ることが望まれる。Z世代の学習者の発音学習のために発音したことを即座に文字で確認できる音声認識アプリケーションを導入したところ、従来の学習方法より早く、正確に韓国語の発音習得ができたという事例もある¹⁰⁾。学習者が単独で自身の発音を即座に文字で確認することができれば、発音の習得を促すことになり、語彙も正しく認識して覚えることができると思われる。それはコミュニケーションスキルの向上に良い影響をもたらすと考えられる。

同じ学習方法を用いても学習者によって学習効果は一様にはならない場合があるとはいえ、コミュニケーションスキルを高めれば、学習者は円滑な会話のためにより効率的かつ実用的なコミュニケーションストラテジーを用いることができると思われる。従って、教育現場では学習者のコミュニケーションスキルを向上するための新たな工夫が常に求められるが、それには日本人学習者の会話状況をより多角的に観察する必要がある。

注

- (1) 日本の大学で韓国語を副専攻とする学生の会話事例である（会話収録：2008-2010年）。本稿では、TOPIK3級以下のレベルに区分された会話の中から学習期間が異なる事例を一つずつ取り上げた。取り上げた会話事例の内容は偶発的なものである。
- (2) 会話事例の下線の部分は、学習者の発音誤用と談話標識の出現、不必要な要素添加。例えば、吃音、母語、感嘆詞の発話、前者の繰り返しの出現などである。また、会話の「..」と「…」の印は発話するまでの一時停止状態の長さを示す。
- (3) 「えーと」、「あの一」は日本人学習者が会話で話が詰まる時によく現れるものなので、口癖及び吃音（남기심 Nam, Gisim・고영근Ko, Younggeun 1986: 174-176）として解釈することもできるが、会話中に日本人学習者が「えーと」、「あの一」を付け加えることによって本人の心理的な状況表現やテーマを和らげる手段として使用しているので、신지연（Sin, Jiyeun 1988）で提示された「間投詞」と類似していると考えられる。会話や談話に現れる談話標識は이정애（Lee, Jeounge 2002: 13-44）が言及したように話し手の習慣や口癖とは区別しにくいところがあるが、本研究では日本人学習者の普遍的な会話場面を考慮して、「えーと」、「あの一」などを, 임규홍（Lim, Gyuhong 1996）で提示された談話標識の分類に基づいて非言語的な談話標識とみなす。
- (4) 日本人学習者の大半は発音が上手くできない場合に恥ずかしいと感じて委縮することがある。それによって会話中に過度の緊張や焦りが生じる。このような心理的な要素は発話によくない影響を与え、会話の展開をあきらめるか、ある特定の発話（本人が発音しにくい、あるいは苦手に思う言葉など）を回避する原因につながる場合が多い。
- (5) 会話や談話に現れる前者の繰り返しは、時間稼ぎや注意喚起、もしくは強調などを表す時に用いるが、本稿の会話事例においては主に時間稼ぎのようにみられる。繰り返しの意味役割について詳しくは、Tannen（1987, 1989: 54）、송경숙（Song, Gyeongsuk 2002: 77-111）、박용익（Park, Yongik 2001: 327-336）、堀口（1997: 63-67）など参照。
- (6) 回避（avoidance）は日本語教育においては「非用」という用語で称されることもある（水谷

1985: 13-14)。

- (7) 田島毓堂・丹羽一彌(1978) 参照。
- (8) [ん] が硬口蓋鼻音に発音されるのは [に] が後ろにくる場合のみとみなされる。「ん」の発音について詳しいことは、斎藤純男(2006)、服部四郎(1951)、木村正武・中岡典子(198)、吐師道子・小玉明菜・三浦貴生・大門正太郎・高倉祐樹・林良子(2016) 参照。
- (9) 迫田(2002: 108) でも、コミュニケーションストラテジーの種類として、学習者の母語使用は目標言語が不明な部分で現れるものとみなしている。
- (10) 拙稿(2020) では、日本人学習者を対象にスマートフォンを利用して韓国語の鼻音発音の学習に取り組み、従来の学習方法と比較した。詳しいことは、박은주(2020) 参照。

参考文献

- 川上葵(1977)『日本語音声概説』桜楓社。
- 木村正武・中岡典子(1989)“撥音と促音-英語・中国語話者の発音-”杉浦美代子(編)『講座 日本語と日本語教育第3巻』明治書院, 139-177.
- 斎藤純男(2006)『日本語音声学入門』三省堂。
- 迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす 第二言語習得研究』アルク。
- 田島毓堂・丹羽一彌(1978)『日本語尾音索引-現代語篇-』笠間書院。
- 野間秀樹(2007)『韓国語教育論講座』くろしお出版。
- 吐師道子・小玉明菜・三浦貴生・大門正太郎・高倉祐樹・林良子(2016)“日本語語尾撥音の調音実態: X線マイクロビーム日本語発話データベースを用いて”『音声研究』日本音声学会, 18: 2, 95-105.
- 服部四郎(1951)『音声学』岩波書店。
- 堀口順子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版。
- 水谷信子(1985)『話しことばの文法』くろしお出版。
- 油谷幸利(2010)『日韓対照言語学入門』白帝社。
- 김수진 외(2002)“일본어 화자의 한국어 평음/격음/경음 지각 오류”『언어 청각장애 연구7-1』한국언어 청각 임상학회, 166-180.
- 남기심・고영근(1986)『표준 국어 문법론』탑 출판사。
- 박용익(2001)『대화분석』역락。
- 박은주(2020)“스마트폰을 이용한 한국어 발음 학습 -일본인 학습자의 철자 ㄴ, ㄹ, ㅇ을 중심으로-”『국제고려학18』, 449-465.
- 신지연(1988)“국어의 간투사의 위상연구”『국어연구83』국어 연구회, 1-67.
- 송경숙(2002)『대화분석』한국문화사。
- 오아림(2006)『말소리가 일본인의 한국어 폐쇄자음 지각학습에 미치는 영향』서울대학교 석사학위논문。
- 이정에(2002)『국어 화용표지의 연구』월인。
- 이노우에 아쓰코(2005)『일본어권 학습자를 위한 한국어 강세구 억양 교육방안』고려대학교 석사학위논문。
- 이수원(2016)『일본인 학습자의 한국어 중성실현 양상에 대한 연구』홍익대학교, 석사학위논문。
- 임규홍(1996)“국어 담화표지-인자에 대한 연구”『담화와 인지2』담화 인지 언어학회, 1-20.
- 우인혜(1998)“한일 언어비교를 통한 발음 교수법”『이중 언어학15』, 319-347.

- 정명숙·이경희 (2000) “학습자 모국어어의 변이음 정보를 이용한 한국어 발음 교육의 효과 일본인 학습자를 대상으로” 『한국어 교육 제 11권 2호』 국제 한국어 교육학회, 151-167.
- 정명숙 (2003) “일본인과 중국인의 한국어 억양” 『한국어 교육14-1』 국제 한국어 교육학회, 233-247.
- 장선미 (2015) 『한국어 학습자의 종성발음 분석 및 교육방안 연구 -영어권과 일본어권을 중심으로-』, 계명대학교, 석사학위논문.
- 정현숙 (2013) 『초급 일본어 모어화자의 한국어 종성비음 발음 오류연구 -오류환경 및 절차 오류와의 상관관계를 중심으로-』, 이화여자 대학교, 석사학위논문.
- 하세가와 유키코 (1997) “일본 학습자에 대한 한국어 발음 지도법” 『한국어 교육8』 국제 한국어 교육학회, 161-178.
- 하세가와 유키코 (2005) “일본어를 모어로 하는 학습자에 대한 음조 교육의 효과” 『한국어 교육 16-3』 국제 한국어 교육학회, 379-404.
- 황연신 (2002) 『한국어 비음에 관한 실험음성학적 연구』 서울대학교, 석사학위논문.
- Tannen, D. (1987) “Repetition in conversation: toward a poetics of talk”, *Language* 63, 574-605.
- Tannen, D. (1989) *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge University Press.

